

しちこうそう げんしんそうず 「七高僧⑥源信僧都について」

今回は、七高僧の第六祖で日本の七高僧の一人目、源信僧都(和尚) (942 (天慶5) - 1017 (寛仁元))
についてお話しします。

『正信偈』 5頁上段9行目 (左から4行目)

げんしんこうかいいちだいきょう へんきあんによかんいっさい
「源信広開一代教 偏帰安養勸一切」

げんしん ひろく いちだい きょう ひら あんにょう き いっさい
《源信 ひろく 一代の教を開きて、ひとえに安養に帰して一切をすすむ。》

げんしんかしょう しゃくそん いちだい あいだと おし ひろ まな じょうど あんにょう
《源信和尚は、釈尊が一代の間説かれた教を広く学ばれて、ひとえに阿弥陀如来の浄土(安養)

ねが よ ひとびと すす
を願ひ、また世のすべての人々にもお勧めになりました。》

源信僧都は、942年(天慶5年、平安時代中期)に大和の国(奈良県)北葛城郡当麻の里にお生まれになりました。

7歳でお父様と死別し、その遺言と信心深いお母様の影響によって、9歳で出家して比叡山(ひえいざん)に上り、第18代天台座主(じえ)の慈慧大師良源を師として、天台宗の教を学ばれました。

慈慧大師良源は元三大師とも呼ばれて、おみくじの創始者としても知られ、厄除け大師ともいわれています。比叡山(ひえいざん)の横川(よかわ)には、慈慧大師がおられた元三大師堂(四季講堂)という建物が今でも残されています。

比叡山は、伝教大師最澄が788年(延暦7年)に建てた一乗止観院が起源で、比叡山寺を建てて学問や修行に励まれたところです。

806年(延暦25年)に天台法華宗が南都六宗から独立する許可を得て、天台・密教・禅・戒の四宗融合の日本天台宗が創立されます。

比叡山は、日本の仏教史上に重要な意味をもつ「山の仏教総合大学」となります。鎌倉仏教の各宗祖(法然、親鸞、道元、栄西、日蓮)をはじめ、多くの名僧たちが、比叡山で学問を修めました。

源信僧都は、その比叡山で13歳の時に受戒して「源信」という名となり、天台教学を究めます。

才能が大変すぐれていたため、15歳で村上天皇の勅命を受けて八講師(はっこうじ)(『法華経』八巻を講義する講師)

に任せられます。天台宗は別名・天台法華宗といい、法華経を重要視しています。

そしてその講義が素晴らしかったために、褒美として織物を賜ります。

源信僧都は大変感激して、故郷の母親に喜んでもらおうと、その理由を書いて、賜った織物を母に送りました。

ところが母は、「母のことを思って贈り物を送ってくれた志はかたじけないけれど、そんな名声や地位を得るために出家させたのではありません。あなたを法師にしたのは、私の後世を救ってほしいと思

ったからです。」と諫めて返信し、「後の世を渡す橋とぞ思ひしに 世渡る僧となるぞ悲しき」という一首の歌を添えて、贈り物を送り返されました。

源信僧都は母のその言葉に反省されて、名誉や出世を捨てて、もっぱら仏道の修行に励まれました。

母からきびしいいまし誠めを受けた源信僧都は、高い位を求めず、横川の首楞嚴院よかわ しりょうごんいんのなかの恵心院に隠棲して仏道修行に励まれたところから、恵心僧都とも呼ばれました。

首楞嚴院は信長の焼き討ちなどで2度消失し、現在のお堂は昭和46年(1971年)の再建だそうです。また現在の恵心堂の建物は、比叡山麓の坂本里坊にあった別当大師堂を移築再建したものだそうです。

比叡山に行ったことのある方はおわかりのように、比叡山には、東塔・西塔・横川の三つの地域があり、東塔の地域には根本中堂や大講堂、戒壇院、阿弥陀堂などがあって、比叡山の中心地域です。

源信僧都がおられた横川は、829年に慈覚大師円仁が、東塔・西塔が賑やかなのを避けて隠棲して修行したことに始まり、954年に慈慧大師良源が首楞嚴院を建てて、三塔に加えられました。

源信僧都はその横川の首楞嚴院にある恵心院に隠棲して、仏法を求められました。ここから「恵心僧都」とも呼ばれるようになります。

源信僧都は修行の結果、救われる道はただ念仏の一門によるほかないことを体得され、往生浄土の道を勧められました。それをまとめて撰述されたのが『往生要集』三巻です。

『往生要集』は、985年、源信僧都が44歳の時に書かれました。多くの経・論・釈の中から往生極楽に関する大事な文を集めて、お念仏を勧めたものです。

この書は日本で最初の本格的な浄土教の教義書であり、法然上人や親鸞聖人など、その後の日本浄土教の興隆に大きな影響を及ぼしました。

『往生要集』は思想面だけでなく、芸術や文学などにも影響を与え、また中国にも伝えられて尊敬を受けました。

芸術では、「地獄変相図」「地獄草子」「餓鬼草子」「六道絵」などに『往生要集』の影響が見られます。また、紫式部の『源氏物語』や芥川龍之介の『地獄変』に登場する「横川の僧都」は、源信がモデルとされるそうです。

1004年、一条天皇のときに源信僧都はごんのしょうそうず権小僧都の位を賜りますが、名誉を好まず一年でこれを辞退されたことにより、世の人々はかえって源信僧都の徳を慕い、敬ったとされます。

源信僧都は寛仁元年(1017年)、76歳で亡くなりますが、臨終にあたっては阿弥陀如来像の左手に結びつけた五色の糸を手にして、合掌しながら入滅したと伝えられます。

せんぞうしゅうしんはんせんじん ほうけにどしょうべんりゅう
「専雑執心判浅深 報化二土正弁立」

せん ぞう しゅうしん せんじん はん ほう け に ど べんりゅう
〈専・雑の執心に浅深を判じ、報・化二土まさしく弁立せり。〉

《さまざまな行をまじえて修める自力の信心（雑修）は浅く、化土（浄土の片隅）にしか往生できませんが、念仏一つをもっぱら修める他力の信心（専修）は深く、報土（真実の浄土）に往生できると明らかに示されました。》

親鸞聖人が七高僧を選ばれた条件の一つに、「教えについて、独自の特色ある説明を加えられた方」というのがありました。

源信僧都の場合は、ここに出てくる「報化二土の弁立」です。

「専雑」とは、「専修」と「雑修」のことです。

「専修」とは、もっぱら阿弥陀仏の本願を信じて、ただ念仏する人で、純粹で二心がありません。

「雑修」は、念仏だけでなく他の雑多な行をまじえて修める自力の人のことで、自分のはからいや我執を離れることができない心です。

「執心」は、執りたもつ心、ここでは信心のことです。

「判浅深」は、浅い・深いを判ずることで、専修は他力の信心で深く、雑修は自力の信心で浅いと分けられました。

「報化二土」は、「報土」と「化土」のことです。

「報土」とは阿弥陀仏の本願に報われた真実の浄土のことで、他力念仏の行者が生まれるところです。

「化土」は、浄土の中の辺地（片隅・周辺）にあり、疑いをもった自力の行者が生まれるところで、

懈慢界ともいいます。浄土のかたほとりです。

「弁立」は、明らかに示すことです。

このように、源信僧都は阿弥陀如来のお浄土を、真実の浄土すなわち「報土」と、方便の仮の浄土すなわち「化土」もしくは「方便化土」の二つに分けられました。

親鸞聖人は、これを高く評価されて、源信僧都を七高僧の一人に加えられたわけです。

ごくじゅうあくにんゆいしょうぶ 「極重悪人唯称仏」

〈「極重の悪人はただ仏を称すべし。〉

《「^{つみ おも}きわめて罪の^{あくにん}重い悪人は^{ねんぶつ}ただ念仏すべきです。》

地獄とは、サンスクリット語で「ナラカ」や「ニラヤ」といい、「^{ならく}奈落」と音写され、「地下にある牢獄」という意味です。

ここから劇場やホールの一階の床下を「奈落」といい、回り舞台やせり出しの装置があります。地獄は、現世で悪い行いを積んだ者が、死後、その報いを受けて墮ちるところで、さまざまな責め苦の極まる世界です。

古代インドの輪廻思想は仏教にも取り入れられて、地獄思想も盛んに説かれました。

閻魔大王と地獄との関係も、インド仏教ですでに認められていたそうです。

これが中国に入り、道教の思想と習合して唐の時代に十王信仰を生み、閻魔大王を地獄の主宰者とする審判思想が広まりました。

日本にも、インド以来の地獄観や輪廻思想が入ってきましたが、日本で人々の心に仏教の地獄思想を深く植え付けたのは、源信僧都の『往生要集』に記された「八大地獄」でした。

『往生要集』の第一は「^{おんりえど}厭離穢土」で、^{いと}もつとも厭い離れるべき世界です。

徳川家康は戦場で「^{おんりえど}厭離穢土 ^{ごんぐじょうど}欣求浄土」と書かれた^{のぼりばた}幟^{かか}旗を掲げて戦っていましたが、それもこの『往生要集』の第一と第二のタイトルから来ている言葉です。

「厭離穢土」は、①地獄②餓鬼③畜生④阿修羅⑤人⑥天 の六道と、⑦その総括から成ります。

最初の地獄は八種に分かれ、^{とうかつ}①等活^{こくじょう}②黒縄^{しゅごう}③衆合^{きょうかん}④叫喚^{だいきょうかん}⑤大叫喚^{しょうねつ}⑥焦熱^{だいしょうねつ}⑦大焦熱^{むけん}⑧無間(阿鼻)

で「八大地獄」と呼ばれ、源信僧都が著した『往生要集』では八大地獄の状況が詳しく説かれます。

そしてこれは「地獄変相図」や「地獄草子」「餓鬼草子」などのように、芸術や文学などにも影響を与えました。

また「^{さんず}三途の川」「^{さい}賽の河原」「地獄の沙汰」「^{あびきょうかん}奈落の底」「阿鼻叫喚」などの言葉も日常語になりました。

源信僧都は、極めて罪の重い悪人が救われるには、阿弥陀仏の名号、すなわちお念仏を称えて浄土に往生させていただくしか道はない、と教えられたのです。

私たちは人間として生きている以上、いやでも罪を犯さずにはいられない極重の悪人です。

法律に違反することは悪です。また、法律には違反しなくても、倫理道徳に背くことも悪です。

しかしそれよりももっと深いレベルで仏様の教えに従えない人、真実に背く人、仏の大慈悲心に逆らっている人、それが「極重悪人」なのです。

ですから仏様の目から見れば、どんな人も悪人と映ってしまうのです。

ついつい自分自身にこだわって思い上がり、阿弥陀如来の本願の教えを他人事のように感じて、自分

のはからいとらわれてしまいがちです。

極重悪人である私たち凡夫であっても、自分へのこだわり、我執から離れ、思い上がりを捨てて、素直に「南無阿弥陀仏」と称えることによって救われると、源信僧都は説いておられます。

^{が やくざい ひ せつしゅちゆう} ^{ぼんのうしやうげんすい ふ けん} ^{だいひむけんじやうしやう が}
「我亦在彼摄取中 煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我」

〈「^{われ}もまた^か彼の^{せつしゅ}摄取のなかに^{あれども}、^{ぼんのうまなこ}煩惱眼を^さ障えて^み見たてまつらずといえども、^{だいひものう}大悲倦きことなくして、常に^{つね}我を^{われ}照らしたもう」といへり。〉

《「わたし（^{げんしんそうす}源信僧都）もまた^{あみだぶつ}阿弥陀仏の^{こうみょう}光明の中に^{なか}撮め取られているけれども、^{ぼんのう}煩惱がわたしの^{まなこ}眼をさえぎって、その^{こうみょう}光明を見ることはできません。しかしながら、^{あみだぶつ}阿弥陀仏の^{おお}大いなる^{じひ}慈悲の^{こうみょう}光明は、そのようなわたしを^{みす}見捨てることなく、常に^{つね}照らしていただきます」と述べられました。》

むしろ「極重の悪人」だからこそ、必ず^{おさ}撮め取ってくださるのだと源信僧都は説いておられるのです。

しかしながら、「かの摄取の中にあれども」と言っておられる通り、阿弥陀如来の本願に^{おさ}撮め取られているという事実があるにもかかわらず、「煩惱が^{まなこ}眼をふさいで見ることができない」というご自身の現実を、源信僧都は率直に表明されています。

絶え間なく湧き出る煩惱や自我へのこだわりや執着、すなわち我執が心の眼を覆い尽くして、本願を自分自身で見えなくしてしまっていると源信僧都は言われているのです。

人間である以上、どんな人も、自分の煩惱を断つことはできません。

人間の三大煩惱は、^{どんよく}貪欲・^{しんに}瞋恚・^{ぐち}愚痴の三毒の煩惱であり、これは欲、怒り、無知の三つとされます。ところが、自分が引き起こしている煩惱によって自分で自分を見えなくしているのだけれども、それでもなお「阿弥陀如来の大悲は飽きることなく、常に私を照らしてくださる」と述べられて、阿弥陀仏の大悲の光、大いなる哀れみのお心は、あきらめることなく、常に源信僧都ご自身を^{まも}照らして護ってくださっていることに、源信僧都は感激しておられるのです。

源信僧都は、摄取の中に身を置いているという事実と、その事実を見られていないという現実とのギャップを直視されて、その食い違いを解消してくださる不可思議なはたらきこそが、阿弥陀仏の大悲であると言っておっしゃっているのです。

これは浄土真宗の教えの中でも、とても大事な言葉だと思えます。

以上で今日のお話を終わらせていただきます。ありがとうございました。